

未来社

山本周五郎からの手紙

土岐雄三編

いいまとまった物を書いて下さる。現実的なのは
右から左に読むが、物に右から左へ消えるうへは勿論
ない。自分の才能を不意に浪費することは一種の罪
です。生涯の出来しめはまとまらずに物とがっかりに
組むことにあると思ふ。怒を出せ。時は返らない。

山本周五郎からの手紙

土岐雄三編

未来社

〔編者略歴〕

土岐雄三（とき・ゆうぞう）

明治40年東京に生まれる。青山学院商科卒後三井信託銀行に入る。以来銀行員と作家の二足わらじをはき、昭和38年同行取締役役を退職。日本ペンクラブ常務理事もつとめた。

著書に『カミさんと私』『くたばれ上役』『花嫁の父』『非行老年のすすめ』『わが山本周五郎』などがある。

山本周五郎からの手紙
一九八四年一〇月一〇日 第一刷発行

定価 一五〇〇円

編者 土岐雄三

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三―七―二
電話〇三―八一四―五五二―一番
振替・東京七―八七三八五番

組版／ふじ活版

印刷／ひろせ印刷

製本／今泉誠文社

目次

昭和二十三年（一九四八）	5
昭和二十四年（一九四九）	12
昭和二十五年（一九五〇）	53
昭和二十六年（一九五一）	139
昭和二十七年（一九五二）	191
昭和二十八年（一九五三）	213
昭和二十九年（一九五四）	221
昭和三十年（一九五五）	228
昭和三十一年（一九五六）	229
昭和三十三年（一九五八）	230
昭和三十六年（一九六一）	235
あとがき	238
山本周五郎作品年表	251

装幀・佐藤和男

山本周五郎からの手紙

この本を編むにあたって

○本書は昭和二三年より一〇余年にわたり、山本周五郎が土岐雄三に宛てた書簡のすべてであり、判明する限り年度順・日付順に編集した。

○各書簡の頭にその順序を表わす番号を付けた。

○各書簡の順序を決めた日付は郵便局消印と書簡に記された日付によるものであるが、中には全く判明できないものもある。その場合は、でき得る限り文面のつながり具合などから推測した。なお、未だ不明な日付については引き続き調査・検討中である。

○書簡に記された日付の方が消印の日付よりも遅くなっているものもあったが、それはそのままにしてある。

○漢字及び仮名遣いはすべて原文通りにした。ただし、明らかな誤字、脱字と思われるものについては、最少限手を加えた。(例、11頁8行の「御勉強を訴ります」↓御勉強を祈ります)ただし同じ行のお信りはルビをふり、そのままにした。)

○ハガキと封書を区別するために、封書には(封書)

と消印の下に入れた。

○宛名はすべて土岐雄三であるため、とくに名前は入れなかったが、夫人宛のものについてだけ記載した。

○宛先住所は、最初の第一、二便の三井信託銀行内と、福岡支店転勤時の二四五、二四六便以外はすべて浦和市常盤町六ノ六四であるので、最初にのみ記した。

○差出人は山本周五郎なので、封書以外には名前はいれなかった。ただし、名前以外の記入のある場合(例えば、怒れる周とか、まかどえんにて周、酔周子)等は最後に入れた。

○昭和二六年の書簡中に時々みられるうさぎのカットは、山本周五郎がハガキにかいてきたものである。

○書簡中、説明の要する箇所には、編者の土岐雄三氏が、簡単な注を付け加えた。

○本文最後に、この書簡が出された昭和二三年以降の山本周五郎の作品年表を付した。

(編集部)

昭和二十三年（一九四八）

1（消印） 七月八日 横浜

横浜市本牧元町二三七より東京中央区日本橋室町三井信託銀行内へ

先日は事のゆき違ひで会へず残念。仕事さきで「脱獄囚の話」* 拝見。それに就て申し上げたし。事情は色々あるだらうが、土岐物としてのユニクな境地が拓けてきたのだから、一時の辛抱をして小物に消へする精力を小説に集中されたし。正直のところ現在あなたは囑望の的なだから。月に一篇づつでもいいまとまった物を書いて下さい。現象的なものは右から左だらうが、物も右から左へ消えるのでは勿躰ない。自分の才能を不当に浪費することは一種の罪ですぞ。生活の楽しみはまとまった物とがうちり四つに組むことにあると思ふ。慾を出せ。時は返らない。

* 「講談雑誌」掲載のコント。



郵便はがき

東京中央区

日本橋室町

三井信託内

土岐雄三 氏

横浜市中区元町

山本周太郎

失日は事のゆき違ひを公へす残念。仕事さき
で「腹獄囚」論一瞥見。それに就て申上げたし。事
物は色々あるからうが、エ岐物としてのユニクな境地
が振付てきたのだから、一時の立止抱をして小物に消へ
する精力をいかに集中されたし。正道のところ現
在あなたも願望の的なんだから。月に一瞥づつで
いいまとまらぬ物を書き下ろす。現象的もののは
右から左からうが、物も右から左へ消えるものは勿論
ない。自分の才能を不当に浪費することは一種の罪
です。生活の面から見ればまともな物とかうちりゆくに
親むことにあると思ふ。慰を寄せ。時は思ふまい。

2 (消印) 八月一日 横浜

「新青年」からハガキが廻送されたかしら。「札つきの淑女」*が非常に佳かつたので一筆呈上したのですが、今日ロマンス社から人が来て三月号を読み、「黎明」を拝見、これまた佳作で万才だと思ひます。「明暗」のはもう少しと思ひますが、この二作、特に「札つき——」のはうは近来の出色です。どうか多作におちいらず、この辺で緊めてやって下さい。もう一度祝杯をあげ（これは独りで）近いうちゼヒいちど会ひませう。御勉強を祈ります。

*「ロマンス」掲載のコント。

3 (消印) 一二月一三日

(封書)

横浜市本牧元町二二七より浦和市常盤町六ノ六四へ
 先日の会も失敗した。あのやうにだらしなく流れる集りは僕は嫌ひです、話もろくにできない。あれは横の失策*です、昨日来ましたから訓戒を垂（？）れておきました。——「計算性」うんぬん、よくわかります、真一*はなにやら云つてゐたが、それはあなたの今後の活動にもつ

とも大切なち、からとなることを信じます。僕はいつも一篇を書くばあい、まづ各パートのバランスを検討する。全軀のバランスの計量がなくては筆はとれません。僕の書くものが、いくらかでも人の感動を呼ぶとすれば、その根本は表現の按分比例がたしかだといふ点にかゝつてゐると思ふのです。画でも彫刻でも音楽でも、主題をよりよく表現するためには、このバランスの計量が基本になるのではないでせうか。——最も主情的なものは最も主智的な手法の上に立つ。僕はさう信じてゐます。——うちえ来る青年たちに僕はいつもかう勧めるのです、「医学、経済、地誌、なんでも勉強したまへ、文学はそれらのどの一つかをマスターするところからいつでも入ってゆくことが出来る」。文科出の文学はもうたくさんだとは思ひませんか。これまでの小説が、計数を知らぬためにどれほどむだなたとどしい手法をとつて来たか、あなた自身がよくわかりのことゝ思ひます。——僕は実地の計数能力を持ちません、然し一篇をなす前提としては、愚鈍なほど全軀の配置の計算をします。あなたの計算性は必らずあなたの最も力強い拠点になることを信じて疑ひません。——小説を書くことは楽しい、然しその前後は辛い苦しいものです、殊に家人の受ける苦しさ（現実的にも抽象的にも）はお勤めの人たちとは格段に違ひます、どうかお家の方たちにはあなたの出来るだけの愛情と誠実をさしあげて下さい。この点については今後たびたびお話し、たいと思ひます。文学が苦業であるといふやうな思ひ方は十九世紀で終りとしませう。制作のよろこびといふ点は変りもなし、また極めて恵ま

れた特権ですが、それ以外は八百屋、酒屋のなりはひと些さかも差はないのですから、さういふ人たちが家人を愛するやうに、我々は家人を愛し誠実でなければならぬと信じます。ただそのために主客顛倒することは困りますけれども。

作家としてのあなたの将来には（大胆不敵ですが）些さかも疑惧を感じません、寧ろ逆に順調すぎるだらうことを心配します。人間は逆境を多く経験するほど強く大きくなるものです。

「艱難汝を玉にす」といふやうな寐言ではありません、日本の不幸な経済地理のなかでは、せめて自ら困難な経程を作らないことには、みんな温室育ちのなまつ、白い人間が出来るばかりです。どうせ文学にとりついたからは、少なくともよりよきもの、他人にはなし得ないものを書いてゆきたいではありませんか。我々は寐るために一帖の畳以上を必要としませんが、肉もいちどに一貫匁は喰べられない、一日に一石の酒は呑めないのです。金は必要ですが、必要以上の金は人間を毒するだけだと思います。——社をおやめになるあなたにとつて、なにより祝福すべき点を申し上げませうか、それは「書くための時間が多くなつた」ことではなく、「なにもしずにぼんやりもの思ひの出来」ることです。「たくさん書ける」ことではなく、「書けないとき本当に苦しい」ことを、味はふ点です。この二つがよりよきものを書くための「黄金の條件」だと申上げておきます。

まずあなたの（もしそれが本当なら）よろこびを、正直に奥さんに返礼して下さい、あなた

が今まで表現し得なかつた愛で奥さんを愛して下さい、するとそこから無限に制作のちからが生れて来ます。近いうち会ひませう、こんどは話をするために。文学のことより、山川草木世事風俗について閑談することが我々を肥やして呉れると思ひます。

「苦楽増刊」を読みました。岸田氏と石川氏のものはいゝ。と思ひました、特に前者はいゝと思ひます。白井喬二のものはいけませんね、落第です、一点もとるところなし、小杉さんも「ごもつとも」と申上げる以外に感想がありません。新潮十一月号の「サラサーテの盤」内田百閒はいゝです。百閒は嫌ひですが、これは近來の佳作と思ひます。おめについたらお読み下さい。——またお信りたよします、もつとたびたびお信りを致しませう。御勉強を祈ります。

御令聞によろしく

周

土 岐 雄 三 様

* 横溝武夫。「新青年」の編集長。

** 風間真一。「講談雑誌」の編集長。

昭和二十四年（一九四九）

4 （消印） 二月二日 横浜

（封書）

私自身の思ひを先に書きます。齒に衣を着せずに、——お手紙を見てまづ「やんぬる哉」と溜息をつきました。あなたが決心をし、御家人みなさんも、その気持になられた。年からいつでも御身辺の状態からいつでも、またジャーナリズムの情勢からいつでも、正しくチャンスだったのに、——やっぱり年末の会談で私が世俗的なことを助言したのが誤りであつた、罪は私自身が負はなければならない。それにしても取返しのないことにしたものだ。——これが私の正直な感慨です。どうか嗤つて下さい。

さて、あなた御自身のことを考へませう。あなたが手紙に書かれてゐるやうに、これはやはり「時期が来てゐなかつた」のだといふことが正しいのでせう、S氏K氏その他の人事葛藤は附帯的な要素であつて、あなたが生活を革められる時期が来てゐなかつたのだといふことが本

当なのだと思います。忙しい生活のなかでこれまで仕事をしてこられた、したがって将来それが不可能である筈はありませんね。社に取られる時間が多くなつて、書く原稿の数が少なくなるとすれば、従来のもの三篇分を一篇に集中すればいいわけですよ。——ものを書くといふことは慾望なのですから、「時間が無い」とか「疲れてゐる」とか「まはりがうるさい」などいふ障害のためにやれなくなる事ではないでせう。なにがしかいふ戯作者は手鎖をされたまゝ書いたと云はれてゐます、また第一次大戦のとき独逸の作家たちは、雑誌も出版もなくなつたのにやつぱり創作を続け、原稿が出来ると辻で立読みをし、投げ銭を貰つて生活したといひます。この仕事のためには「これこれの条件がなくてはだめだ」といふことは原則として存在しないと信じます。もしあなたが社用で時間をとられるために、或ひは疲れるために書けないとすれば、それは単にそれだけのものなので、書けなくとも惜いほどのものではなかつたといへませう。さうした障害のために書けない程度のものなら、書けなくとも大したことはないではありませんか。——あなたは勝手なときに寐起きをし、映画を観、音楽を聴き、自由に旅行をして悠くり仕事にうちこみたい。といふ空想をしてをられた。しかし右のやうなことは空想でしかあり得ないことです。あなたがいちどこの仕事に専念できる状態になると、その刹那に凡てが變つてくるのです。旅行も観劇も酒興も、もはやあなたがそれ以前に空想したやうなものではなくなつてきます、しかも仕事は決してよけいに出来るものではありません、現在の月

給より更に少ない収入、——ときには何ヶ月も無収入で過さなければならぬ時期が（然も半ば永久の周期的に）ある、そして不幸なことに仕事のためには、それが寧ろ必要でさへあるのです。

生活をきりつめ、むだな疲労を避けて、謙虚に仕事をしてゆきませう、月に一篇、三月に一篇でもいゝではありませんか、ひとに出来ない仕事をこつこつとやつてゆきませう、他人が一年ですることなら三年かゝつてやるつもりで、——われ／＼は短距離競争をしてゐるわけではありません、死ぬまでは生きてゐるのです、五十そこ／＼でぼけてしまふ人のことを考へたら、なにもさうせかせかすることは無いと思ひます。——なにやらわけのわからないごたくを並べました、どうか意味は判じて受取つて下さい。あなたがどういふ状態であらうと、あなたの仕事は決してあなたから逃げてゆきはしません。あまり一点をみつめすぎないで、ひとつ悠くりやつてゆくことにしませう。今日はお宅え伺ふつもりでしたが、横*のものが今日あがる筈のところまで十枚にならぬといふありさまで動けません。近くいちどおめにかかる機会をつくるつもりです。元気でやつて下さい。妄言多謝

周

土 岐 雄 三 様

* 横溝武夫。